

多和田葉子と方法としての翻訳：脱構築と「ポスト人種」の問い

ブレット・ド・バリー

(コーネル大学)

多和田葉子の作品によって引き起こされた批評的言説は、ここ数年、だんだん幅広くなってきましたが、多和田さん自身もその言説と対話的な関係を持続けることを重んじているようです。例えば、2005年にここ立命館大学で開かれたシンポジウムに参加して、パネリストたちからの、多和田文学に見られる「国文学を破壊するプロセス」についての質問に応じましたし、また『ボルドーの義兄』という短編小説の出版後には、佐々木敦さんとの「一問一答」を雑誌に掲載しています。そこでは、佐々木さんも、多和田文学では「言葉遊びの占める位置が格段に高い」と指摘して、それをいくつかの「破壊のプロセス」に関連させ、多和田作品には、「異なる言語同士が意味と無関係につながってしまうという言葉遊びの相」がある、と述べています。¹⁾

また、それにくわえて、多和田作品に見られる「異なる言語」をつなぎ合わせ、並置させることは、翻訳の一つの側面として、シュルレアリスム文学の「思いがけない提出物」(trouvaille)という技法とよく比較されます。²⁾ ロラン・バルトは、この"trouvaille"のような言葉を併置する技法を、ジョルジュ・バタイユの文学に見て、その文学を「開かれた文学」(open literature)とか、「何ものにも被われていない文学」としていう言葉を使って評価しました。バルトのいう「開かれた文学」とは、「われわれが相手にしているのは所記のない記号作用である。[……] いっさいの解説の手の届かないところに位置する、なにものにも被われていない文学、ひとり形式批評のみが——それもずっと遠くから——付いて行くことのできる文学」を意味しています。³⁾

今日の発表で、わたしは多和田葉子文学にある「翻訳という方法」を、バルトのいう「形式批評」によって読んでみようと思います。というのは、多和田作品を「相手にして——それもずっと遠くから——付いて行くこと」を試してみたいのです。形式批評というのは、ある作品をテーマよりも、形式上の実践に注意して読むことです。ヴァルター・ベンヤミンが目にしたとおり、一つの言語からもう一つの言語に、変質せずに伝えられる透明なメッセージというものはありません。言葉でも、テ

キストでも、音としてあるいは文字や印刷されたものとして繰り返され、再生されるものである限り、言葉とテキストは移動することができるものです。

多和田葉子の作品を翻訳として形式上の分析で読むことは、美的な領域に制限してしまうような読み方に見えるかも知れませんが、そうではなく、形式批評が、多和田作品を新しい観点から読む可能性を、私たち読者に与えることができるだろうといったお話をさせていたきたいです。

これに関して、ひとつ注意したいのは、先に触れた「言葉遊び」について、批評家たちの意見が分かれていることです。ある批評家は、多和田文学の言葉遊びの異化(defamiliarizing)の効果は、多和田自身がドイツにいる「異邦人」であって、ドイツにいる日本人であることに原因を帰しています。もちろん、多和田さんの小説には、日本語や日本の地名などがしばしば出てくるので、そうした読み方を促しているように見えることは否めません。ただ、ほかの批評家は、そうした読み方をする読者は、単にある種のルアー、偽のエサに誘惑されているだけであるとも論じています。例えば、ドイツおよび日本文学の研究者ジョン・ナムジュン・キム(John Namjun Kim)は、多和田文学の主人公が、しばしば「現実」ではなく、舞台上のパフォーマンスをしていることに気をつけなければいけないと主張します。キムはそのパフォーマンスを"ethnic irony"と呼んでいます。というのは、多和田の作品の中で、民族化された主体は、むしろ舞台の上で、支配文化にある他者のステレオタイプを、アイロニカルに演じているからです。キムが目にしたのは、そういう演技によって、普通の読者がその他者のステレオタイプに騙されてしまいやすい点です。多和田さんのテキストは、読者が騙されやすいところを暴露するのです。

こういう議論を念頭に置けば、民族的差異や人種的差異についての問いが多和田文学が提出するいかに大事な問いであるかが分かるでしょう。しかし、それを認めた上で、それならば多和田文学が民族性や人種の記号に、決まった「正しい」指示物を示しているということになるのでしょうか？ もし、彼女の文学の「方法としての翻訳」

が、記号とそれが指示する物の関係を絶えず不安定なものにするものとしたら、そんなことは可能でしょうか？キムは、その可能性を否定して、レスリー・エイデルソン（Leslie Adelson）の言う「指示性の謎」、すなわち多和田文学は、読者を謎の中に置き去りにしようとしているという議論をフォローします。⁴⁾

多和田文学を、翻訳、「指示性の謎」、エスニシティ、人種の問いという観点から考察する前に、まず、最近の翻訳理論、批判的人種理論に触れておきたいと思います。⁵⁾たとえばイタリアのサンドロ・メッザードラ（Sandro Mezzadra）が現在のグローバル資本（とその先例の無い商品、イメージ、身体の流れ）を背景に、「資本が無数の多言語に対面した時、それを自分のコードに「翻訳」するプロセス」と述べています。⁶⁾このメッザードラの指摘について、私は、「開かれた文学」、「何ものにも被われていない文学」としての多和田文学が、バルトのいう「一切の解説の手が届かないところに位置する文学」にほかならないと主張したいのです。つまり、それは現代資本のコードに「翻訳」されえない、還元できないテキストなのです。

次に、最近の「批判的人種研究」のいくつかの観点から、多和田文学を考察しようと思います。フェミニズム理論家のロビン・ウィーグマン（Robyn Wiegman）が20年ほど前、トランスナショナルな資本の時代が出現すると同時に、北米に新しい人種言説が現れたと指摘しました。すなわち1997年に制作された『フォレスト・ガンプ』（*Forrest Gump*）という映画には、全く新しいタイプの「リベラル白人男性」のポートレートが現れた、と彼女は言います。この「リベラル白人男性」は、白人至上主義と、そのすべての歴史から忘却によって完全に切断された肖像です。その上、この映画が忘却された過去のものとして白人至上主義を位置づけているのと同じように、ガンプも過去と現在の差別や搾取から切断されています。例えば、ナイキ（Nike）のランニングシューズが身体障害者であるガンプの空想的な移動の象徴としてしきりに浮き彫りにされますが、そのシューズが生産された労働搾取の状況は、映画の中では隠蔽されていますし、ガンプがその搾取とは全く無関係な存在であるように見せてもいます。ウィーグマンは『フォレスト・ガンプ』が現れた時代は、ちょうど「ホワイテネス・スタディーズ」（Whiteness Studies）が出現しつつあった時代だった、ということも指摘しています。彼女によれば、「ホワイテネス・スタディーズ」は、人種としての「白」と「黒」を脱構築することができましたが、そうした上で、例えば、

白人とアフリカン・アメリカンが、おなじように資本主義の被害者であるといった意見も主張しています。ただ、その状況は同じではないとウィーグマンは言っています。⁷⁾

エバ・チェルニャフスキー（Eva Cherniavsky）とデニス・フェレイラ・ダ・シルバ（Denise Ferreira da Silva）も、ウィーグマンと同じように、20世紀末から21世紀の初めを、トランスナショナルなモノの流通と、文学や理論における本質主義の脱構築とが同時に起きた、グローバル資本の時代であると指摘する研究者がいます。チェルニャフスキーとダ・シルバの二人は、「ホワイテネス・スタディーズ」に対しても、また、ある種の「人種研究」に対しても、疑問を提しています。というのは、こうした研究に従事する研究者は、私たちが、人種や人種の差異の言説がすでに脱構築された時代に暮らしていると思込んでいるからです。もしそうなら、なぜレイシズムの暴力が今なお残存しているのでしょうか？⁸⁾

ブラジル生まれのダ・シルバは2009年に「No-Bodies: Law, Racality, Violence」（「ノー・ボディーズ：法・人種性・暴力」）と題された論文を出版しました。その3年前から、ブラジル政府が、麻薬の密売を取り締まるために、一般の警官の代わりに、国軍をファベラ（favela）に派遣し始めたことに関する論文です。もともと、近隣の秩序を守る責任は、警察官に委ねられていましたが、2006年から、リオデジャネイロでは、軍隊が国家を守るという口実で、自動小銃を持って、ファベラの若い人々と戦い、人々を殺すようになりました。そのファベラの人たちをダ・シルバは「no-bodies」と呼んでいます。なぜなら、その人々は、国家の前に、自分の身体さえ所有していない人間として見なされているからです。国家に気まぐれに破壊されうる存在なのです。⁹⁾

チェルニャフスキーとダ・シルバは、それぞれちがう観点から、例えば「ホワイテネス・スタディーズ」やポール・ギルロイの『ブラック・アトランティック』で賞賛された「ポスト人種の時代」に対して、意義を唱えています。¹⁰⁾二人とも、身体の捉え方に焦点を絞り、ホーテンス・スピラーズ（Hortense Spillers）の忘れがたい奴隷船の議論から、教示を受けているようです。¹¹⁾奴隷が船の帳簿に登録される時、身体としてより、肉体として見られた、とスピラーズは指摘しました。奴隷が、船に乗せられる時、人間としてではなく、むしろどれほどの重さであるか、どれほどの容積が必要であるか、というふうに計られたのです。その意味で、奴隷の身体も、全体性を持つ身体として見られなかった、解体されうる

“No-Body”であったと言えます。

またチェルニャフスキーが指摘しているのは、19世紀の奴隷廃止主義の言説において、「奴隷」ということばそのものは、「自由」との二項対立として定義されていたことです。自分の身体を（契約をととしても）売ることのできる内面的主体性を持つ人間は（だいたい白人でしたが）、「自由」な人間であって、その内面性を持っていない人間、自分の身体を規定しえない、売ることのできない人間は、奴隷であると定義されました。だからチェルニャフスキーは、19世紀のその言説においては、人種とは、「皮膚」や「色」によって定義されるものではなく、身体の有機的なフォームの見方（形式の読み方）によって定義されたものであった、と言っています。そして、そのフォームが有機的全体性を持つかどうかということは、見えない内面性があるかないかということで見極められたのです。

こういうふうに、私たちの身体のフォームについての意識が、弁証法的に形作られたのだとチェルニャフスキーは主張します。彼女の意見では、人種は「すでに形作られた身体」に書き記された印（mark）」ではなく、「パフォーマンスティヴィティ」（performativity）です。

ダ・シルバも、チェルニャフスキーに批判された研究者たちは目で見える「白さ」（whiteness）と「黒さ」（blackness）を誤解して、それを「近代権力の戦術が作ったもの」としてというよりも、その原料（raw materials）として見ている」と述べています。¹²⁾ 私たちは、目で見える見方そのものを変えなければならないのではないのでしょうか？

今日、残った時間で、多和田葉子の『ボルドーの義兄』で、この問いがいかに取り上げられているかを見ていきたいと思います。さきほど、多和田文学における翻訳が、言葉と意味の関係を離脱させる（脱構築する）プロセスであって、現代のグローバル資本のコードを解読することや、還元できないテキストであると言いました。この短編小説では、透明なメッセージが滑らかに伝えられるシーンよりも、誤まって訳されたり、翻訳できなかったりする瞬間にハイライトが当てられます。メッザードラが考えるように、グローバル資本が言語の複数性を自らの唯一のコードに縮めるとしたら、『ボルドーの義兄』は、そう簡単には解読できないテキスト、「解読を超越する文学」を読者に差し出しているのです。たとえば、主人公の優奈がボルドー行きの切符をハンブルク駅で買おうとした時、コンピュータも駅員も誤訳をします。言葉の音、書き方、意味は、必ずしも一致しないので、駅員が、フ

ランス語の“Bordeaux”ではなく、「bordo」と打ち込むと、コンピュータは「検索結果ゼロ」と答えます。

職員が「bordo」と打ち込むと、コンピュータは「検索結果ゼロ」というそっけない答えを返してきた。謙虚な口調で「ボルドーのスペルを押してくれますか」と頼まれ、優奈はカウンターに乗り出して、まるで心の奥底に隠した秘密を打ち明けるようにささやいた。べ、オ、エル、デ、エ、ア、ウ、イクス。¹³⁾

もちろん、ドイツ語版『ボルドーの義兄』（*Schwager in Bordeaux*）のスペルの発音は違って、*bee oo err de ee aa uu iks* です。¹⁴⁾

旅をする間に優奈は、コードを翻訳できない機械によく出会います。たとえば、ボルドーにある市民プールに入ろうとする優奈は、ある困難を体験します。「どうやって入場券を機械に読ませたらいいのか分からなかった。機械類には時として、輸出用に作られていないために、地方独特の表情を頑固に保ち続けているものがある。」¹⁵⁾

『ボルドーの義兄』の登場人物は、しばしば境界に面して翻訳を行います。そういう場面では、しきりに、商品がトランスナショナルに流通する経路に近いところに現れます。留学生である優奈は、国際運送会社でアルバイトをします。会社のビルは文字通り“*au bord de l'eau*”（水際）に位置しています。エルベ川に面する机から、優奈はコンテナ船が港にスルスル入ってくるのを見ます。船が、商品と一緒に、異言語の言葉と文字を海上に運ぶのです。

以前優奈は、鉄でできた脇腹に中国語の名前が筆で書かれたコンテナ船をよく見かけた。こんなに大きな字を書いた書道家の筆はどれほど長かったことか。五メートルか、それ以上か。いつからか、韓国の名前が増えた。三星、現代。韓国の会社の名前は、漢字でもハングルでもなくアルファベットで書かれていたが、優奈の頭の中で自動的に漢字に戻り、優奈は名前そのものではなく、「あ、ゲーゲンヴァルト（現代）が通る！」と言った具合に、ドイツ語でその意味を口にした。¹⁶⁾

優奈の同僚は、見えない文字がなんであるかわからないので、「もう、あたしの見えないものの話しないで」と文句を言います。それに対して、優奈は「他人の目に何が見えているかなんて、分からない。」と答えます。¹⁷⁾

この場面では、グローバル資本のコンテナ船で世界中に運ばれている言葉が優奈によって翻訳されています。優奈の会社は、最近 新しいビルに引っ越しましたが、「灰色のコンクリートの壁が長く伸びて、散歩する人たちとエルベ川との間を切断していた。」¹⁸⁾とあるとおり、同じエルベ川に沿って、企業資本の境界が公のスペースに食い込んでいる様子も見えます（公のスペースに企業資本が食い込むプロセスは、現代のグローバル資本の一面であるとメッザードラとニールソンは言っています）。¹⁹⁾「フレキシビリティ（柔軟性）とモビリティ（可動性）」というモットーがビルのファサードにかけてあります。社長は、新しいビルの美的レベルをはこって、従業員にこういう風にはなしかけます——「新しく出て来た経済大国は、歴史的建物を野蛮に壊す。だから金銭も我々より早く手に入れることができる。しかし我々には美がある。」²⁰⁾

チェルニャフスキーは、「われわれの時代が、人種本質主義言説が非合法化された時代であるとみんなが信じている」が、「その言説は絶えず民族主義ナショナリズムとネイティヴィズム (nativism) として再び現れてくる。そして、同化されえない、管理されえない人口、いやおうなしに人種化された人口を追い払うか、取り込む政策として現れてくる。」と言っています。²¹⁾ 優奈は、エルベ川のほとりに、同化されえない人間、「奇妙な人間たちが姿を現してはエルベ川の中に消えていった」放棄された土地があるのを知っています。これらの人々からは言葉も奪われていたようです。「太股に血が滲んでいた」娼婦に見える女は、「水際に立って、忘れられた小さなボートと指を使って話をしていた。」が、「会社が、港に新しく建ったビルに引越した年には、もう町の盲点ではなくなっていた」。²²⁾

グローバル資本の拡大しつつある境界が、隠れた暴力で人間の居場所を奪ったり、排除したり、沈黙させたりします。その排除と包摂のプロセスは、なぜいつも人種化された人々を標的にするのでしょうか？なぜ、レイシズムは「人種」の本質なるものが脱構築された後も、現れつづけるのでしょうか？ここで注目すべきなのは、『ボルドーの義兄』の中で、民族や人種の「差異」の可視性 (visibility) がどんなふうに挑戦にさらされているかを語るために、別の言語との間の翻訳がどう配置されているかという観点です。そしてグローバル資本の暴力を正当化するそのコードがつねに問い直され、錯覚され、転覆されるために使われているということです。身体の様子を誤読して、身体的差と言語的差を混乱させるシーンは、

『ボルドーの義兄』にいくつかあります。例えば、優奈はボルドーに到着してからすぐ、フランス語の字引と教科書を持って散歩に出かけて、小さい店の窓に手塚治虫の『ブラック・ジャック』のフランス語版を見かけます。ブラック・ジャックは優奈の初恋の相手でした。優奈がそのコミックを懐かしく見つめている時、地元の少年が近づいてきて、おんなじ本を見つめるシーンです。優奈は勇気をふりしぼって、教科書にのっていた例文をそのまま口にします。「[コレハオモシロイホンデス。][……]少年は緑がかった灰色に光る目をまっすぐ優奈に向けたが、驚いている様子はなかった [……] しばらく黙っていたが、それから、驚いたことに日本語で答えた。「僕も好きだよ。もう全部読んだ。」それから少年はその場を去り、優奈は一人そこに残された。」²³⁾

しかし、一番意味のあるシーンはおそらく優奈の大阪の高等学校時代の次の話です。

優奈が初めてアフリカ大陸と「接した」のは、正確に言えば「接しなかった」のは、大阪での高校時代のことだった。友達が地方紙の広告欄に、イヴェス・Sという名前の男性が「フランス語教えます」という広告を出しているのを見つけた。その友達はアラン・ドロンの熱狂的なファンだったので、すぐにそこに出ていた番号に電話をかけ、低い声で流暢に日本語を話すその男性に会いに行く約束をした。そして丈の短い買ったのワンピースを着て、イヴェスの家に向かった。それは谷崎文学を映画化するのに使えそうな優雅な日本家屋で、狭いアパート育ちの友達は一目見て圧倒されてしまった。出て来て挨拶した男がイヴェスだと分かるまで、時間がかかった。男の外見が予想外だったので、友達は言葉を失い、黙ってひよいとお辞儀をして、そのままバス停の方へ歩き出した。「こういうことはこれが初めてじゃないんです」と、男はこういう場にしてはあまりにも落ち着いた、親切と言っていいくらいの声で、後ろから叫んだ。優奈もその頃は、その友達と同じぐらい無知だった。フランス語という言葉が、アフリカ大陸に移民として出かけて行って、そこでどういうことをしたのかについては全く知識がなかった。優奈は図書館へ行って、歴史の本を何冊か読んだ。そして、イヴェスのところでフランス語を習う決心をした。が、うまくいかなかった。「この電話番号はただいま使われていません。」優奈は溜め息をついた。フランス語を習う試みが挫折したのはこれが一

回目だった。イヴェスの身にその後何が起こったのかは何年かしてからある映画で知った。²⁴⁾

この長く埋もれていた優奈の記憶から、何が『ボルドーの義兄』のプロットを動かしているのかという謎に対して、ほとんど唯一のヒントが得られると思います。元々、優奈はアフリカのダカールにフランス語を勉強しに行こうと思っていたのですが、お金が足りなくて、ボルドーを次善の場所として選んだのです。ですから、優奈のフランス語の学習動機と、「フランス語がアフリカにどういうことをしていたか」について学びたい思いとが、『ボルドーの義兄』のプロットに絡み合っているのです。ここに掲げたエピソードは、優奈が言語の授業に対して願望を抱く意味がさらにはっきりするでしょう。言語の授業について、次のように語られています。

授業では大切な発見がいろいろあり、たとえばスコットランドのアーティストのフォトグラフィー（写真）の背景に小さくフィー（家畜）が写っているのを発見した。もし家畜 Vieh のスペルを間違えて Fie と書いていなかったら、「フォトグラフィー」という単語の最後の音韻フィーと家畜のフィーを間違えることもなかっただろう。しかし何かと何かを間違えることがなかったら人は何も見ることはできない。²⁵⁾

写真は、普通、一番誠実な、もっとも強くインデックス性（indexicality）と結びついているヴィジュアル・メディアのようにみられています。しかし、この場面では、誤訳をとおして、写真に、以前は見えなかった何かあたらしいものが発見されています。優奈が言うように、「他人の目に何が見えているかなんて、分からない。」のです。

優奈が、小説の冒頭で、フランス文学者である年上の女性レネに始めて会うときに、「あたし女優なんですけど、ラシーヌを能の形で上演しようと思っているんです。アドバイスが欲しいんです。」と言います²⁶⁾。語り手は、その言葉は、優奈がレネをコーヒーを飲みに誘うための嘘とか虚構だと示唆します。優奈自身が自分は女優だと言った言葉とともに、このコメントは私たち読者に、この場面で民族的アイロニーが演技されていることに十分な注意を促すはずです。ちなみに、ボルドーの義兄についての論文で、齋藤由美子さんが、ラシーヌという言葉をもじる重要な言葉遊びを発見しています。この劇作家の名前 "Racine" を日本語のカタカナでつづると、フラン

ス語の "La Chine"（中国）と同じ発音になるのです。齋藤さんは、この言葉遊びと、優奈が手帳に書く漢字とを関連づけています。²⁷⁾

しかし、私は、このラシーヌを、フランス語のもう一つのラシーヌ、「種」という植物学的な意味を持つ "racine" と結びつけることができないだろうかと考えます。エミリー・アプター（Emily Apter）は *The Translation Zone*（『翻訳ゾーン』）という著書の中で、北米の比較文学を設立した研究者、レオ・シュピッツァー（Leo Spitzer）が、フランス語の "racine"（「根」という普通名詞）の語源である、ラテン語の "ratio" の歴史的変遷を跡づけて、ヨーロッパのファシズムの時代に「生物学的な意味」に墮落したと嘆いたことに触れています。ご存知の通り、その「生物学的な意味」とは、「人種」（race）でした。アプターの言葉を借りると、言葉あるいはロゴスが、この「不吉なねじれによって、種を中心とする人類観に向かうようになった」わけです。²⁸⁾

『ボルドーの義兄』の「ラシーヌを演技する」ことは、確かにチェルニャフスキーの「パフォーマティヴィティ」としての人種と共通点があるようです。先に見た自動車メーカーの名前の「ヒュンダイ」と「ゲーゲンヴァルト」のように、「パフォーマンス」という概念は、わたしたちが何を見ているか、何を見ているかと思っているかという問いにもつながっています。

中川成美さんが『ボルドーの義兄』論で指摘したように、優奈が旅をする道程には、埋められた植民地主義の痕跡があちこちに現れていますが、それらは忘却の対象であるために、ほとんど誰にも見えないのです。²⁹⁾ この問題は大切な問題で、私は別の機会にあらためて追求したいと思います。植民地主義の元で、奴隷の身体が開かれ、解体され、肉体として測られていたのと同じように、今日、ダ・シルバが "no-bodies" と呼ぶ、全体として認められない身体が、民族的差異や人種的差異のコードの下で搾取され続けています。それは絶えず否認される一方で、トランスナショナルな資本によって行われるグローバルな翻訳や解説を通じて繰り返し実行されている暴力なのです。

注

- 1) 多和田葉子、佐々木敦「一問一答」（『国文学：解釈と教材の研究』54巻9号、学燈社、2009年）71ページ。
- 2) Bettina Brandt, "The Unknown Character: Traces of the Surreal in Yoko Tawada's Writing," *Yoko Tawada: Voices from Everywhere*, ed. Doug Slaymaker (Lanham, MD: Lexington Books, 2007), 111-125.

- 3) ロラン・バルト「眼の隠喩」(篠田浩一郎他訳『エッセ・クリティック』晶文社、1972年) 333 ページ。
- 4) John Namjun Kim, "Ethnic Irony: The Poetic Parabasis of the Promiscuous Personal Pronoun in Yoko Tawada's "Eine leere Flasche" (A Vacuous Flask)," *German Quarterly*, v.83 no. 3 (Summer 2010), pp. 333-352; Leslie Adelson, *The Turkish Turn in Contemporary German Literature* (Palgrave MacMillan, 2005).
- 5) *Critical Race Theory: The Key Writings That Formed the Movement* by Kimberle Crenshaw (Editor), Neil Gotanda (Editor), Gary Neller (Editor), and Kendall Thomas (Editor). (New York: New Press, 1996), その他を参照。
- 6) Sandro Mezzadra, "Living in Translation. Toward a Heterolingual Theory of the Multitude," in Richard F. Calichman and John N. Kim ed. *The Politics of Culture. Around the Work of Naoki Sakai*, London: Routledge, 2010: 121-137
- 7) Robyn Wiegman, "Whiteness Studies and the Paradox of Particularity," in *boundary 2*, Volume 26, No. 3, Fall 1999: 123-132.
- 8) Eva Cherniavsky, *Incorporations: Race, Nation, and the Body Politics of Capital* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2006). Denise Ferreira da Silva, *Toward A Global Idea of Race* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2007).
- 9) "No-Bodies: Law, Raciality, Violence" *Griffith Law Review* (2009), Vol.18, no.2.
- 10) Cherniavsky, xvi-xvii.
- 11) Hortense Spillers, "Mama's Baby, Papa's Maybe: an American Grammar Book," *Diacritics* (1987), 65-81.
- 12) Ferreira Da Silva, *Toward a Global Idea of Race*, p. 8.
- 13) 『ボルドーの義兄』 83-84 ページ。
- 14) Yoko Tawada, *Schwager in Bordeaux: Roman*, Tübingen: Konkursbuch Verlag Claudia Gehrke, 2008: p.78.
- 15) 『ボルドーの義兄』 197-198 ページ。
- 16) 『ボルドーの義兄』 131 ページ。
- 17) 同前。
- 18) 『ボルドーの義兄』 69 ページ。
- 19) Sandra Mezzadra and Brett Neilson, *Border as Method: The Multiplication of Labor* (Duke University Press, 2013).
- 20) 『ボルドーの義兄』 69-70 ページ。
- 21) Cherniavsky, xii.
- 22) 『ボルドーの義兄』 130 ページ。
- 23) 『ボルドーの義兄』 161-162 ページ。
- 24) 『ボルドーの義兄』 106-107 ページ。
- 25) 『ボルドーの義兄』 57-58 ページ。
- 26) 『ボルドーの義兄』 12 ページ。
- 27) Yumiko Saito, "Une Tentative de Double Translation: Analyse du Voyage à Bordeaux (Schwager in Bordeaux) de Yoko Tawada", *Études Germaniques*, 2010/3 no 259, 525-534.
- 28) Emily Apter, *The Translation Zone* (Princeton University Press, 2006), 28-30.
- 29) Shigemi Nakagawa, "Ein Europa Der Verführung: Über Schwager in Bordeaux," *Études Germaniques* 2010/3 (no. 259), 651-663.

付記

本稿の日本語版の作成にあたって、平田由美さんと田中アキさんの協力を得ました。ここに記して感謝いたします。